

中間支援活動助成(基本)事業 実績報告

団体名	(特非)場とつながりの研究センター	代表者 名	(職名) 理事長	(氏名) 長谷川 計二
事業名	NPOの自己診断力を高めるための評価のあり方研究会			

< 事業実施実績 >

	相談業務 延べ回数/団体数	ネットワークの構築 ・ 情報提供 件数	人材育成 (講座開設等) 延べ参加人数/回数	書類作成指導 件数	その他 (調査研究等) 件数
R5 実績	323	116	34	45	26
R6 計画	300	-	研究会4回	-	-
R6 実績	356	85	研究会3回(50人)	52	38

< 効果と成果 >

場とつながりの研究センターは「意欲する人」が集う場を作ることを目的に立ち上げた団体で、関心をもつプロジェクトにスタッフや支援者が集まってくる場づくりに取り組んでいる。

すべての活動において「当事者の声を聴く」ことを軸に取り組んでおり、被支援者がいつまでもその地位にいるのではなく支援者側に回るような「役割シャッフル」を通して主体性を育み、有力な運営スタッフに育つなど、キャリア形成の視点からNPOとの関わり方を提案できているように考えている。

NPO相談支援事業では、民設民営の強みを活かし、アウトリーチ支援をはじめ団体の実情に合わせたオーダーメイドの支援に取り組んできた。NPOを「社会参加の器」として捉え、寄付・助成金やボランティアなどさまざまな社会資源を集めること・参加の方法についての支援を試行・実践してきた。

NPO支援は単につなぐ・紹介する・情報を提供するのではなく、何をそこから生み出そうとしているのか、本当の解決の状態とはなにか、継続的な関与のあり方も含めて支援のあり方が問われているように感じている。

近年、中間支援組織に置ける「伴走支援」というキーワードが安っぽく使われている印象があり、支援者による権力性を含め、支援のあり方をまとめていく必要があるように感じている。

< 今後の展望 >

評価については、日本非営利組織センターの話から、助成財団等がリスク回避を目的に「NPO評価」を強く志向するに至った背景や、組織規模ごとの「評価基準」の「客観性」の難しさを痛感し、新たな基準では組織規模に関係ないミニマムサイズでの基準を提案しようとしていること、などを理解した。

加えて、川北氏の話から、評価の主体は誰か、自治の観点から問い直す必要があることを痛感した。

そのためには、自分たちのガバナンスを「やることが目的」とならず、なぜそれが必要なのかの意味を理解できるように伝える必要性を感じた。

NPOの評価を考えるNPO法人が新たに設立(新潟県認証)するなど、NPO自身によるNPO評価の必要性が徐々にムーブメントになっていることを承け、次年度はよりいっそう踏み込んで、団体自身が支援者の力を借りながらセルフ評価ができるような指標のあり方を考えていきたい。

< 収支決算書 >
(収入)

項 目	金 額 (円)
中間支援活動助成金	5 0 0 , 0 0 0
自己負担等	3 8 8 , 2 1 9
合 計	8 8 8 , 2 1 9

(支出)

区分	項 目	金 額 (円)	左のうち 助成対象金額 (円)
直 接 経 費	人件費	7 1 0 , 5 0 0	3 5 8 , 0 0 0
	新聞図書費	2 2 , 5 7 0	2 2 , 0 0 0
	消耗品費	6 2 , 3 0 7	5 9 , 0 0 0
	その他 (旅費交通費等)	7 2 , 7 8 0	5 1 , 0 0 0
	小 計	8 6 8 , 1 5 7	4 9 0 , 0 0 0
間接経費 (一般管理費)		2 0 , 0 6 2	1 0 , 0 0 0
合 計		8 8 8 , 2 1 9	5 0 0 , 0 0 0